

令和 5 年 9 月 13 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02717

研究課題名(和文) 吃音の高校生に対する効果的な通級による指導及び担当教員の養成システムの開発的研究

研究課題名(英文) Research on developing effective teaching methods and the pre-service and in-service training systems for resource room teachers who work with high-school students with stuttering

研究代表者

川合 紀宗 (KAWAI, NORIMUNE)

広島大学・人間社会科学部研究科(教)・教授

研究者番号：20467757

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多面的・包括的吃音評価ツールであるCALMS評価尺度を活用し、吃音のある成人や中高生を対象に実施した。結果、発話場面や学校の生活場面に対する苦手意識が強いこと、自身の吃音に対する思いや悩みと評価結果が一致していることが確認された。また、吃音のある思春期の生徒や成人を対象に、吃音支援の長所と短所について尋ねたところ、専門的な支援、個別指導、グループ指導の重要性が長所として示された。一方、短所としては、時間的制約が大きな課題として挙げられた。これらの情報を基に、プレ・インサービス研修プログラム案を作成・実施したところ、特に知識やスキルの獲得に関する項目について顕著な効果が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

吃音のある児童生徒は、学校や社会生活上でさまざまな困難に直面している。本研究がその現状を明らかにすることで、教育関係者や関係機関に対して吃音者への適切な指導支援の必要性を喚起し、社会的な課題解決に貢献する。また、思春期における吃音支援の重要性について明らかにすることで、吃音のある生徒の学校生活の質の向上や二次障害の予防につながる。生徒の個人差を考慮した多面的・包括的評価ツール及びプレサービス・インサービス研修プログラムを開発し、効果の検証をすることで、吃音のある生徒個々のニーズに合わせた適切な指導や支援策の提案が可能となる。これにより、吃音のある生徒の自己肯定感の向上や社会参加の促進に寄与する。

研究成果の概要(英文)：The current study used the CALMS Rating Scale, a multidimensional and comprehensive stuttering assessment tool administered to adults and middle and high school students who stutter. Results confirmed that there was a strong sense of difficulty with speech and school life situations and that the evaluation results were consistent with their thoughts and concerns about their own stuttering. When adolescents and adults who stutter were asked about the pros and cons of stuttering support, the importance of professional support, individualized instruction, and group instruction were indicated as pros. On the other hand, time constraints were cited as a major issue as a disadvantage. Based on this information, a proposed pre-in-service training program was developed and implemented, which was found to be remarkably effective, especially for items related to the acquisition of knowledge and skills.

研究分野：特別支援教育

キーワード：吃音 思春期 包括的評価 当事者の意識 支援内容

1. 研究開始当初の背景

(1) 吃音のある児童生徒の置かれた現状

文部科学省(2016)によると、小中学校で通級による指導を受けている児童生徒数は約9万人で、うち4割弱の3万5千人余りが言語障害者である。言語障害は、機能的構音障害のように、小学生の間に言語障害が軽快・治癒する例もあるが、吃音のように、中学校卒業後も症状が軽快・治癒せず、周囲からからかわれる等により、自己肯定感の低下や不登校、ひきこもりといった二次障害に陥るケースが少なくない。このように、吃音に伴う学校・社会生活上の困難が持続する可能性があることから、高校においても継続的に指導支援が行われる意義は大きい。しかし、吃音者に対しては年齢に応じた指導支援が必要であり、小学生に対する支援方法を高校生に適用するわけにはいかない。よって高校における通級による指導において、吃音のある生徒は、ニーズに応じた適切な支援を受けることができない可能性が高い。さらに、支援・評価法が確立されないことには、研修制度の充実も図れず、高度な知識と技能を持つ教員を十分に確保できない。

(2) プレサービス・インサービスの不足

現行の特別支援教育のプレサービスについては、特別支援学校教諭免許状を取得させることがミッションとなっており、特別支援学校に在籍しない言語障害児の指導支援法や教育課程、心理生理病理については、教育職員免許法施行規則第七条に定められる特別支援教育に関する科目第三欄（免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域に関する科目）5単位の一部で学ぶのみである。つまり、特別支援教育を学ぶ学生でさえ、言語障害教育についての十分な知識技能を身につけないまま卒業し、教員になっているのが現状である。

(3) 日本独自の包括的な吃音者向けの評価ツールの不足

Starkweather(1999)は、吃音の最大の特徴として「個人差」を挙げている。この「個人差」とは、吃音の言語症状の重症度における「個人差」も挙げられるが、吃音に対する悩みの深さ、どもりやすい音・単語・状況・場面、日常生活や社会生活を営む上での困難度などの「個人差」も含まれる。特に年齢が高くなるほどこの「個人差」が大きくなるため、このニーズに応じた指導支援の在り方を提案する必要がある。また、近年欧米では、吃音児者の「個人差」に着目し、吃音の言語症状だけでなく、全般的な認知能力や言語能力、口腔運動能力、それから吃音に対する知識・認識面、行動面、心理・感情面、社交性、環境要因などといった様々な要因を包括的・総合的に評価を行う「多面的・包括的モデル」が提唱されるようになった(Healey ら, 2004; Guitar ら, 2009; Yairi ら, 2010 など)が、日本の文化差を踏まえた思春期吃音者向けの独自の多面的・包括的評価ツールは現在のところ作成されていない。

2. 研究の目的

平成30年度より高校における通級による指導が開始されるが、これまで特別の教育課程をもたなかった高校に通級指導教室を設置しても、指導支援法や評価法の蓄積がなく、なおかつ適切な指導支援を行うことのできる教員の確保が困難になることが懸念される。特に言語障害のある生徒に対する指導支援については、現行の自立活動の領域だけでは網羅できないきめ細やかな指導支援と高度な専門性が要求されるが、教員養成（プレサービス）、現職教員研修（インサービス）ともに、システムが未整備である。そこで本研究では、言語障害教育の中でも特に指導支援が困難とされる吃音を取り上げ、①日本独自の多面的・包括的吃音評価ツール、②高校通級指導教室での吃音指導支援法、③吃音に関するプレサービス・インサービスプログラムの開発を行う。

3. 研究の方法

高校の通級指導教室（言語障害）における教員養成・専門性の向上と思春期の特性を考慮したエビデンスに基づく指導支援法を確立させるために、(a) 多面的・包括的吃音評価ツールを開発し、吃音のある生徒に対する指導支援法の内容や指導効果の現状を分析する、(b) 思春期に特有の困難や悩みを改善させる指導支援法の開発を行う、(c) 指導支援法を適用し、その効果を検証することにより、思春期の特性を考慮した「エビデンスに基づく吃音の指導支援法」を開発する、(d) 欧米やアジアにおける言語聴覚士・言語障害教育担当教員のプレサービス・インサービスシステムの分析を行い、吃音指導支援を中心とした、言語障害教育担当教員専門性向上研修および教員養成課程における講義内容の提案を行い、その効果を検証する。

4. 研究成果

高校の通級指導教室（言語障害）における教員養成・専門性の向上と思春期の特性を考慮したエビデンスに基づく指導支援法を確立させるために、(1) 多面的・包括的吃音評価ツールを開発し、吃音のある生徒に対する指導支援法の内容や指導効果の現状を分析する、(2) 思春期に特有の困難や悩みを改善させる指導支援法の開発を行う、(3) 指導支援法を適用し、その効果を検証することにより、思春期の特性を考慮した「エビデンスに基づく吃音の指導支援法（吃音のEBP）」を開発する、(4) 欧米やアジアにおける言語聴覚士・言語障害教育担当教員のプレサービス・インサービスシステムの分析を行い、吃音指導支援を中心とした、言語障害教育担当教員専門性向上研修および教員養成課程における講義内容の提案を行い、その効果を検証する。

(1) 多面的・包括的吃音評価ツールの開発

1) 学齢期吃音の ICF に基づくアセスメントプログラム（小林, 2013）の活用：

活動・参加及び環境要因に関する項目を抽出した活動・参加及び環境要因質問紙試行版(以下、質問紙試行版)を作成し、大学で支援を受けていたり、吃音のセルフヘルプグループに所属する成人 28 名、及び通級指導教室や大学の教育相談等で支援を受けている吃音のある中高生 16 名に実施した。質問紙試行版は、小学校における発話・コミュニケーション場面(教科書を音読する、授業で発表する、クラスメイトと話すなど)20 項目、学校の生活場面(国語、数学、休み時間、日直当番、全校集会など)30 項目、教師やクラスの人などの接し方(話を最後まで聞いてくれる、発表等の仕方を考える、話し方をからかったりするなど)24 項目の計 74 項目であった。

吃音のある成人に実施した結果、(1)対象者の過半数が、発話・コミュニケーション場面の 20 項目中 13 項目、生活場面の 29 項目中 3 項目に「苦手」と回答するなど、これらを苦手と感じている対象者が多い、(2)発表等のしかたを考えるなどの吃音に対する直接的な支援があったと回答する対象者が少ない、(3)発話・コミュニケーション場面と学校の生活場面の回答に相関が見られることが明らかとなった。また、吃音のある中高生に実施した結果、(1)成人と同様、発話・コミュニケーション場面、学校の生活場面を苦手と感じている対象者が多い、(2)成人に比べ、発表等のしかたを考えるなどの吃音に対する直接的な支援があったとする回答者が多い、(3)発話・コミュニケーション場面と学校の生活場面の回答とに相関がある、(4)発話・コミュニケーション場面及び学校の生活場面の苦手さと吃音の心理面の問題の大きさとに相関がある一方で、これらと吃音の言語症状の大きさとには相関がないことが明らかになった。この結果は、以前小学生に対して実施した同様の調査結果と比較すると、吃音のある中高生は、コミュニケーション場面や学校生活場面に対する苦手意識がより強まっているといった結果が得られた。

2) CALMS モデル(Healey, Scott-Trautman, & Susca, 2004)の中高生への適用可能性の検討:

1) の中高生のうち、支援を受けた経験があり、かつ自身の吃音について正確に認識できている 6 名を対象に、CALMS 評価尺度を実施した。このモデルは、認知、感情、言語、運動、社会的要素の 5 つの領域を統合した吃音支援の包括的アプローチであり、吃音が相互作用する様々な要因に影響される動的な障害であることをクライアント・臨床家の双方が認識し、これらの要因に包括的に対処することを目的としている。CALMS モデルは、評価と支援計画において特に有効あり、吃音重症度尺度、CALMS 評価尺度などの評価ツールを使用し、CALMS の 5 つの領域を測定し、吃音の重症度を評価する。この評価により、支援の必要がある領域を特定することができる。

CALMS 評価尺度を適用し、対象者に対して算出されたデータと実際の吃音に対する思いや悩みがどの程度正確に反映されているかを確認した結果、6 名とも自身の吃音に対する思いや悩みと CALMS による評価結果は一致していると述べた。このことから、中高生においても CALMS モデルおよび評価尺度は適用可能であると考えられ、新たな多面的・包括的吃音評価ツールを開発するよりも、本研究では現行の多面的・包括的吃音評価ツールを使用することとした。

3) 当事者やことばの教室担当教員に対するインタビュー調査等の実施:

米国の研究協力者とともに日米の吃音のある思春期の生徒 4 名(内日本人 2 名)や成人 6 名(内日本人 3 名)に対して中高生の時に吃音臨床を受けることの意義や課題についてインタビュー調査を行い、支援を受けた経験や支援内容、思春期における吃音に対する支援の必要性についての意見を聴取すると共に、吃音の問題を多面的・包括的に評価する尺度(OASES)を実施した。結果、思春期に吃音の支援を受けることの長所として、主に以下の 3 点が挙げられた。

①専門的な支援:ことばの教室は専門的な知識と経験を持つ教員が担当している場合、吃音の適切な支援を受けることができた。特に思春期は、いじめやからかいを経験した当事者も複数名おり、そのため吃音を構成する問題は、思春期において複雑な要素が絡み合う場合があり、心理専門職等も含めた包括的な支援が重要となる。

②個別指導:ことばの教室では、個々の教育的ニーズに応じた支援が行われる。吃音の問題を構成する要素は個々に異なるため、個別指導で生徒のニーズに適切に対応できる可能性が高い。

③グループ指導:他にも同じく吃音に悩んでいる子がいることが分かって気が楽になった、吃音のある年長の人との関わりが心の拠り所になった、等の意見があった。このようにグループ指導は、自己認識やコミュニケーションスキルの向上、共感や支え合いの場となる。

一方、短所として主に以下の 3 点が挙げられた。

①時間的制約:吃音の支援は、原則特別な場(ことばの教室)での指導となるため、教員、生徒、保護者いずれにとっても時間的制約がかかる場合がある。特に校外通級の場合、家庭によっては子供を送迎できる家族がいなかったため支援を受けることをあきらめなければならない、生徒にとっては、授業を抜けて指導を受ける必要があり、そのことが負担となる可能性がある、教員は、増えるニーズに十分に対応できるだけの空き時間の確保の困難や、巡回指導の場合、複数の学校を移動する時間を確保する必要があり、そのことが負担になる可能性がある。

②学校や在籍学級との調整:ことばの教室の支援を受ける場合、その生徒が在籍している学校や学級との調整が必要となる。授業やクラブ活動等とのバランスを取る必要があり、先述した時間的制約やスケジュールの調整が課題となる場合がある。

③生徒の心理社会的な負荷:思春期は、他者からの評価が気になる、いじめやからかいが増えるなど、心理社会的な負荷が増える時期である。特に吃音のある生徒の場合、否定的な自己意識が高まり、自己肯定感を下げ、自信を失う可能性がある。ことばの教室での支援が本人にとって意義が感じられない場合、逆に負荷となる可能性もある。

(2) 指導支援法の適用効果の検証

本研究では、日米の吃音のある思春期の生徒や成人に対してインタビュー調査を行い、吃音に

に対する支援を受けた経験や支援内容、思春期における吃音に対する支援の必要性についての意見の聴取、吃音の問題を多面的・包括的に評価する尺度（OASES）を実施した。また、小学校ことばの教室担当者に対して実施した、卒業予定の児童についての懸念についてのデータを分析した。さらに、これらのデータをもとに、思春期の生徒に対する支援プログラム案を完成させた。

CALMS モデルは、吃音の原因となる様々な要因を多面的・包括的に分析し、包括的かつ個別的な支援アプローチを提供する。認知的、感情的、言語的、運動的、社会的要素に取り組むことで、このモデルは、吃音のある中高生が自身の吃音に対する理解を深め、流暢さのスキルを向上させ、Well-being の全体的な向上を支援することを目標としている。本研究では、吃音のある中高生 4 名に対して CALMS モデルを適用した支援を実施した結果、概して以下の効果が認められた。まず、知識・認知面に対する効果としては、中高生が吃音に関する正しい知識を身につけ、吃音の瞬間をより正確に認知することで、自身の吃音症状の傾向や、それをどう変化させるかの認知力向上や他者との適切なコミュニケーションの図り方に対してより理解を深めることができた。

心理・感情面に対する効果としては、否定的な感情や吃音症状に対する過敏さ、吃音に関連する状況や場面における恐怖や不安などの感情をコントロールする能力や、自己肯定感や発話場面に対する自信の向上が認められた。言語面に対する効果としては、中高生は単語レベルから会話レベルまでの発話長や、語彙や文法の複雑さを調整することを通じて言語能力を高めることができた。また、回避を減らし、よりスムーズな発話を目指すこともできるようになった。

運動面への効果としては、中高生が吃音修正技術の特定や口腔運動スキルを高めることで、自らの吃音と流暢な発話の違いを把握し、運動スキルを改善することができた。最後に社会性・社交性への効果として、中高生は日常生活や様々な異なる状況での会話を増やすことができた。また、社交的なスキルを獲得し、実践的なコミュニケーションの機会を自ら増やしたり、指導場面で他人との会話などのロールプレイを通じて、新しいスキルを実際の場面で使用した者もいた。

このように、CALMS モデルに基づく吃音臨床は、個別のニーズに合わせた支援計画を作成するため、中高生に対して包括的で効果的な支援を提供することが可能である。吃音に関する理解の深化、流暢性の向上、社会性・社交性スキルの向上により、吃音のある中高生は自己の吃音に対する対処能力を高め、そのことが包括的な Well-being の向上につながると考えられた。

(3) 海外の言語聴覚士・言語障害教育担当教員のプレサービス・インサービスシステムの分析及び講義内容の提案・効果の検証

COVID-19 の影響で、唯一情報入手できた米国における言語療法士のプレサービス・インサービスの実態について報告する。

1) 米国における言語療法士 (SLP) のプレサービス・インサービスの実態

①教育および知識の構築：吃音の性質、その原因、吃音が思春期の子供の学習や生活への与える影響に関して理論的な知識と実践的な理解を促す包括的な研修機会を設ける。これには、理論的な知識と実践的な理解の両方が含まれる。思春期の吃音に特化したワークショップ、セミナー、学会を開催する。SLP に思春期の吃音に関連する論文、書籍、事例を読むよう奨励する。

②実践的な経験：吃音のある中高生の指導付き臨床実習をする。SLP は実践的な経験を積みながら、経験豊富な臨床家から直接学ぶことができる。SLP は、吃音の障害に対するより広い理解を深めるために、思春期のクライアントと接することを奨励する。

SLP が、青少年の吃音支援を専門とする専門家を観察し、学ぶ機会を提供する。

③コミュニケーションスキルのトレーニング：積極的な傾聴スキル、共感力、レポート構築力の向上に重点を置く。SLP は吃音のある中高生を包括的に支援し、学習や生活しやすい環境を作るための方策を知っておく必要がある。思春期の吃音に関連する感情的・社会的側面に対処するための戦略など、効果的なカウンセリング技術に関する研修を提供する。SLP が困難な会話を練習し、適切な支援と助言を提供する自信を持てるように、ロールプレイングを行う。

④連携とネットワーキング：SLP は、心理師、教員、作業療法士など、思春期の吃音者に関わる他の専門家と協力することが求められる。学際的なアプローチにより、吃音者が直面する課題を全体的に理解することができる。SLP のサポートグループなど、SLP が経験を共有したり、アドバイスを求めたり、仲間から学んだりできるネットワーク作りの機会が提供されている。

⑤継続的な専門性向上・職能開発：青少年の吃音に焦点を当てたワークショップ、ウェビナー、研修、学会等への参加を通じて継続的に教育を受けることを推進している。これにより、SLP は最新の研究および支援法について常に情報を獲得することができる。経験豊富な SLP が、経験の浅い SLP に対して思春期吃音への対応に関して指導するメンタープログラムも提供されている。

⑥自己省察とスーパービジョン：吃音への支援や吃音のあるクライアントに対する自身の偏った信念や態度の有無やそれらの程度を理解するために、SLP に自己省察を促す。これは、SLP が偏った信念を持たず、より効果的な支援を提供するのに役立つ。

2) プレサービスの効果検証

筆者が吃音または言語障害に関する授業を実施している 5 大学 1 専門学校（計 68 名）において、本研究の知見を基にした吃音の包括的支援に関する授業内容（8 コマ）を設定し、実施した。吃音臨床に関する授業の実施効果や学生の学習効果を評価するためのマトリックスについては以下の項目を設定し、各項目 5 点満点で受講者に採点してもらい、事前、事後の変化を比較した。

その結果、Table 1 に示すほとんどの項目で、事後の得点が高くなる傾向が示されたが、特に知識やスキルの獲得に関する項目のほとんど、事後の得点の方が有意に高かった。一方で、専門的コミュニケーションスキルや自己成長に関わる部分については有意差が認められなかった。

Table 1. プレサーストレージングの評価マトリックスの概要

- 基盤的知識の習得:
 - 吃音の定義や原因に関する知識の習得
 - 吃音の診断・評価法に関する知識の習得
- 獲得した知識の応用力:
 - 吃音の診断・評価技能の獲得
 - 吃音の支援計画の作成と支援スキルの獲得
 - 効果的コミュニケーションスキルの向上
- 専門性:
 - 吃音支援に関する臨床倫理の獲得
 - 専門的なコミュニケーションスキルの獲得
 - 多文化・多様性に対する理解と配慮の向上
- 評価能力:
 - 吃音を構成する問題に関する包括的評価や支援の進行状況の確認能力の獲得
 - 支援の結果を評価・改善する能力 (PDCA) の獲得
 - 研究データや文献の批判的な評価能力の向上
- 自己成長:
 - 自己反省と能力向上のためのリフレクション能力の獲得
 - 専門分野への情報収集と継続的な学びの意欲
 - 吃音者との共感や理解の促進

3) インサーストレージングの効果検証

筆者が年4～6回実施している言語聴覚士やことばの教室担当教員向けの吃音臨床研修の受講者から複数名選定し、本研究のために別途設定した思春期の吃音生徒を支援することの内容に特化した講習会に参加してもらった。毎回2時間で、1時間は講義、1時間は臨床検討や演習であった。内容は、吃音臨床経験のない参加者もいるため、講義についてはプレサーストレージングで網羅する内容に加え、吃音臨床の理論や吃音の心理・生理・病的側面など、応用的な内容も加えた。また、臨床検討や演習では、経験者と未経験者が同じグループで活動できるよう配慮した。そこで吃音臨床・評価に関するスキルのみならず、効果的コミュニケーション能力や、収集した臨床データの分析能力、自ら設定した成長目標にどの程度近づいているかを確認する能力、臨床家としての長所・短所のメタ認知と改善・成長策を理解し、行動に移す能力等を参加者同士で評価し合い、その結果を踏まえ、筆者も参加者に最終的なフィードバックを行った。

Table 2. インサーストレージングの評価マトリックスの概要

- 学習目標の達成度:
 - 受講者が設定した学習目標の達成度
 - 吃音臨床に関する知識やスキルの習得度
 - 受講者が修得した内容の臨床現場の活用度
- 態度と自己評価:
 - 受講者の吃音臨床に対する態度や意識の変化。
 - 受講者自身の学習成果や成長
- 受講者の参加度と積極性:
 - 講習会の参加率や積極的な参加度。
 - 受講者がディスカッションやグループ活動への参加度
- フィードバックと評価:
 - 他の受講者からのフィードバックや評価結果の反映度
 - 受講者自身が提案する改善点や要望内容の質の高さ

(4) 研究のまとめと今後の課題

本研究では、多面的・包括的吃音評価ツールとして、CALMS 評価尺度を活用し、吃音のある成人や中高生を対象に実施した。その結果、発話・コミュニケーション場面や学校の生活場面に対する苦手意識が強いこと、自身の吃音に対する思いや悩みと評価結果が一致していることが確認された。また、吃音のある思春期の生徒や成人を対象にインタビュー調査を行い、吃音支援の長所と短所について尋ねたところ、専門的な支援、個別指導、グループ指導の重要性が長所として示された。一方、短所としては、時間的制約が大きな課題として挙げられた。

今後の課題として、次の3点が挙げられる。まず、吃音の指導支援法の開発と効果の検証を継続的に実施する必要がある。思春期に特有の困難や悩みを改善する吃音支援法の開発を行い、その効果を検証する必要がある。特に、いじめやからかいなどの社会的要因が吃音に与える影響を考慮し、心理専門職を含めた包括的な支援の効果も検討する必要がある。思春期の特性を考慮したエビデンスに基づく吃音の指導支援法の開発を目指す必要がある。次に、プレサーストレージングシステムの分析と教員養成課程の提案：欧州やアジア地域における言語聴覚士・言語障害教育担当教員のプレサーストレージングシステムを分析し、吃音指導支援を中心とした教員専門性向上研修や教員養成課程の講義内容の提案を行い、その効果を検証する必要がある。

さらに、現在の多面的・包括的吃音評価ツールに基づいて、吃音のある生徒に対する指導支援法の内容や指導効果検証する必要がある。また、吃音のある中高生の特性を考慮し、評価ツールの改善や追加項目の検討を行う必要がある。これらの課題に取り組むことで、言語障害教育担当教員の専門性向上と思春期の特性を考慮したエビデンスに基づく吃音の指導支援法の確立に向けて、より具体的な提案を行うことが可能となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計34件（うち査読付論文 27件 / うち国際共著 12件 / うちオープンアクセス 20件）

1. 著者名 Mohammed Abu Bakor Siddik, Kawai Norimune	4. 巻 16
2. 論文標題 Government Primary School Teacher Training Needs for Inclusive Education in Bangladesh	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Whole Schooling	6. 最初と最後の頁 35-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Pov Sokunrith, Kawai Norimune, Murakami Rie	4. 巻 24
2. 論文標題 Identifying causes of lower secondary school dropout in Cambodia: a two-level hierarchical linear model	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Inclusive Education	6. 最初と最後の頁 1735542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13603116.2020.1735542	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Iva Nandya Atika, Kawai Norimune	4. 巻 26
2. 論文標題 Secondary School Science Teachers' Knowledge, Responses, and Abilities to Create Inclusive Science Practices in General Education Classrooms in Banjarnegara Regency, Indonesia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of International Development and Cooperation	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 堅田 利明, 川合 紀宗	4. 巻 61
2. 論文標題 吃音のある子どもをもつ保護者の養育態度に関する研究 グループインタビュー法による養育過程の心情と、専門家の介入、親の会参加が及ぼす影響の質的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 140-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.61.140	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kawai Norimune, Matsumiya Nagako, Otani Midori, Kawatani Noriko, Ward William J.	4. 巻 18
2. 論文標題 Inclusive Education for Foreign Students with Special Needs in Japan : An Approach by the Maximizing Potential in Japan International Academy	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/49086	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Almutairi Areej, Kawai Norimune, Abeer Alharbi	4. 巻 29
2. 論文標題 Faculty Members' and Administrators' Attitudes on Integrating Students with Intellectual Disability into Postsecondary Education	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Exceptionality	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/09362835.2020.1727330	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Ediyanto, Restuti Maulida, Iva Nandya Atika, Kawai Norimune	4. 巻 11
2. 論文標題 The Pre-Service Teachers' Attitudes Towards Inclusive Education: An Empirical Study in Yogyakarta City, Indonesia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Discourse and Communication for Sustainable Education	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2478/dcse-2020-0007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小林 宏明	4. 巻 11
2. 論文標題 吃音のある学齢児の指導 (訓練) ・支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どものこころと脳の発達	6. 最初と最後の頁 48-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34572/jcbd.11.1_48	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林 宏明	4. 巻 13
2. 論文標題 特別支援教育の視点を活用した幼児の言葉の指導の提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 95-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Iimura Daichi, Miyamoto Shoko	4. 巻 89
2. 論文標題 Public attitudes toward people who stutter in the workplace: A questionnaire survey of Japanese employees	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Communication Disorders	6. 最初と最後の頁 106072
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jcomdis.2020.106072	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Iimura Daichi, Ishida Osamu, Takahashi Saburo, Yokoi Hideaki, Miyamoto Shoko	4. 巻 52
2. 論文標題 A Questionnaire Survey About Support Requests From School-Age Children and Adolescents Who Stutter	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Language, Speech, and Hearing Services in Schools	6. 最初と最後の頁 717-727
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1044/2020_LSHSS-20-00069	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Chua Shin Ying, Sakai Naomi, Lee Jaehoon, Harrison Elisabeth, Ping Tang Keng, Mori Koichi	4. 巻 65
2. 論文標題 Comparison of social anxiety between Japanese adults who stutter and non-stuttering controls	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Fluency Disorders	6. 最初と最後の頁 105767
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24467/onseikenkyu.25.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Arongna, Sakai Naomi, Yasu Keiich, Mori Koichi	4. 巻 63
2. 論文標題 Disfluencies and Strategies Used by People Who Stutter During a Working Memory Task	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Speech, Language, and Hearing Research	6. 最初と最後の頁 688-701
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1044/2019_JSLHR-19-00393	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 堅田利明・川合紀宗	4. 巻 60
2. 論文標題 吃音のある子どもをもつ保護者の養育態度に関する研究 - 父親・母親の心情のズレと、専門家受診、親の会参加が養育に及ぼす影響 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 332-334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5112/jjlp.60.332	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川合紀宗	4. 巻 23
2. 論文標題 合理的配慮に対する校長としての取り組みの在り方 インクルーシブ教育システム推進のために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊プリンシパル	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Pov Sokunrith, & Kawai Norimune	4. 巻 26
2. 論文標題 Review of Changes of Education Policy for Development in Cambodia : from the 1860s to the 1980s	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of international development and cooperation	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Miyamoto Shoko	4. 巻 8
2. 論文標題 Co-Occurring Disorders in Children Who Stutter: Analysis of Using the Japanese Checklist for Possible Cluttering	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Special Education of Research	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ishida Osamu, Imura Daichi, Miyamoto Shoko	4. 巻 14
2. 論文標題 The Relationship Between Attentional Capture by Speech and Nonfluent Speech Under Delayed Auditory Feedback: A Pilot Examination of a Dual-Task Using Auditory or Tactile Stimulation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Human Neuroscience	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fnhum.2020.00051	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林宏明	4. 巻 8
2. 論文標題 吃音のある子へのクラスでの対応 - 発達障害等を併せ持つ子も含めて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊「発達教育」	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林 宏明・宮本 昌子	4. 巻 59
2. 論文標題 吃音のある小学生の発話・コミュニケーション活動と小学校生活への参加の質問紙調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 159-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗山 菜帆子・飯村 大智・宮本 昌子	4. 巻 47
2. 論文標題 吃音親子相互交渉場面評価シートの開発 評価者間信頼性の予備的検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 聴覚言語障害	6. 最初と最後の頁 61-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本 昌子	4. 巻 60
2. 論文標題 クラタリング・スタタリングを呈する児童の発話特徴 構音速度と非流暢性頻度の測定	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 30-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuta, M., Kawai, N, & Ushiyama, M.	4. 巻 6
2. 論文標題 Quality of life of people with intellectual disabilities: Current trends in Denmark	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Special Education Research	6. 最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyamoto, S.	4. 巻 6
2. 論文標題 Development of Japanese Checklist for Possible Cluttering ver.2 to differentiate Cluttering from Stuttering	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Special Education Research	6. 最初と最後の頁 71-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林 宏明	4. 巻 72
2. 論文標題 吃音の理解と支援：症状と原因、周囲の配慮や専門家・支援者の関わり	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 1246-1252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyamoto Shoko	4. 巻 6
2. 論文標題 Development of Japanese Checklist for Possible Cluttering ver.2 to differentiate Cluttering from Stuttering	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Special Education Research	6. 最初と最後の頁 71-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林宏明・宮本昌子・吉田麻衣	4. 巻 46
2. 論文標題 吃音のある児童への教師・他児の態度や対応：吃音のある児童の学校生活に対する質問紙調査を通して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 聴覚言語障害	6. 最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林宏明	4. 巻 71
2. 論文標題 吃音の理解と対応：話し言葉の問題(子どもの困ったクセ)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 94-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川合紀宗	4. 巻 34
2. 論文標題 吃音の評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JOHNS耳鼻咽喉科・頭頸部外科	6. 最初と最後の頁 217-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計37件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 16件)

1. 発表者名 Oe Takuya, Iimura Daichi, Sakai Naomi, Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Disfluent Speech and the Psychological Aspect among Bilingual PWS in Japanese
3. 学会等名 International Conference on Special Education In South East Asia Region 10th Series 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawai Norimune
2. 発表標題 The Implementation of Special Education in the Society 5.0
3. 学会等名 The 2nd International Conference on Special Education and Social Inclusion (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉澤菜々美, 川合紀宗
2. 発表標題 吃音や就労経験の有無による発話場面に対する不安の違いに関する研究 個人インタビュー調査に基づく検討
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第8回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kawai Norimune, Kobayashi Hiroaki, Hara Yuk, Miyamoto Shoko, & Trichon Mitchell
2. 発表標題 An Investigation of Teens' Opinions on Receiving Stuttering Therapy From “Speech Teachers” at School
3. 学会等名 ASHA CONVENTION 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miyamoto Shoko, Kobayashi Hiroaki, & Sakai Naomi
2. 発表標題 Co-occurrence of Learning Disability, Attention-Deficit Hyperactivity Disorder, and Autism Spectrum Disorder in Children Who Stutter
3. 学会等名 ASHA CONVENTION 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawai Norimune
2. 発表標題 Unfamiliar with AAC Implementation? : Let's start with mid-tech AAC devices” . Second East Asian Regional Conference on Augmentative and Alternative Communication (AAC): Let's start with mid-tech AAC devices
3. 学会等名 Second East Asian Regional Conference on Augmentative and Alternative Communication (AAC): Uniting local and international perspectives (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kawai Norimune, Kobayashi Hiroaki, Hara Yuki, & Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Reasonable Accommodations in Regular Classrooms for Middle-School Students Who Stutter in Japan
3. 学会等名 IALP (International Association of Logopedics and Phoniatrics) 2019 Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川合紀宗・Derek E. Daniels・吉澤健太郎・北條具仁
2. 発表標題 思春期の吃音臨床をめぐる課題と今後に向けて
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第7回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本 昌子・酒井奈緒美・小林宏明・柘植雅義
2. 発表標題 吃音に他の問題を重複する児童の実態 保護者の回答結果を中心にした検討
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第7回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮本昌子
2. 発表標題 段々わかってきた！クラタリングのこと
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第7回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯村大智・石田修・宮本昌子
2. 発表標題 吃音のある児童・生徒の周囲への要望の実態 児童・生徒間でのニーズの変化に着目して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林宏明
2. 発表標題 吃音のある学齡児への多面的・包括的な教育実践 - 「ICFに基づいたアセスメントプログラム」による教育・支援 -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshimasa Sakata, Yuki Hara, Hiroaki Kobayashi, Shoko Miyamoto, Naoshi Maeera, Norimune Kawai, Mariko Yoshino, Koichi Mori
2. 発表標題 Experimental Treatment of Early Stuttering: Preliminary Findings of a Randomized Controlled Trial
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Norimune Kawai, Hiroaki Kobayashi, Yuki Hara, Shoko Miyamoto, Masashi Hayashida, Nagako Matsumiya
2. 発表標題 Clinical Methods for School-Age Children Who Stutter: A Survey Study
3. 学会等名 2018 American Speech-Language-Hearing Association (ASHA) Convention (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林 宏明
2. 発表標題 発達障害を伴う吃音の指導・支援(3) - クラタリング(早口言語症)への取り組み -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林 宏明
2. 発表標題 吃音当事者による、吃音のある子どもの保護者への相談対応に関する実態調査
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroaki Kobayashi & Yoshimata Sakata
2. 発表標題 Characteristics of peer consultation among members of self-help groups
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本 昌子
2. 発表標題 クラタリング入門と実践，吃音との合併への対応
3. 学会等名 第63回音声言語医学会総会・学術講演会ポストコンGRESセミナー「吃音」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Komiya Ayumu & Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Application development for improving fluency with regular rhythm stimulation
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miyamoto Shoko, Yamazaki Shinako, & Imatomi Setsuko
2. 発表標題 Treatment of Cluttering Based On Rhythmic Synchronization
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yamazaki Shinako & Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Preliminary investigation of rhythmic effect on fluency of children who stutter
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Isabella Reichel, Yulia Filatova, Maisa Haj-Tas, Pallavi Kelkra, Shoko Miyamoto, Yayoi Shimizu, Shu-Lan Yang, Yvonne van Zaalen
2. 発表標題 International Cluttering Association Forum: 10 Years of Successful Collaboration
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sakata Yoshimasa, Hara Yuki, Kobayashi Hiroaki, & Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Experimental Treatment of Early Stuttering: Preliminary Findings of a Randomized Controlled Trial
3. 学会等名 The 2018 Inaugural Joint World Congress of Stuttering and Cluttering (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田 修・飯村 大智・宮本 昌子
2. 発表標題 吃音児と保護者の学校・家庭での対応に関する要望について(1)
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯村 大智・石田 修・宮本 昌子
2. 発表標題 吃音児と保護者の学校・家庭での対応に関する要望について(2)
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗山 菜帆子・飯村 大智・宮本 昌子
2. 発表標題 「吃音親子関係評価シート」の活用可能性について
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田 悠甫・宮本 昌子
2. 発表標題 吃音のある児童が学校生活の中で求める配慮・支援内容に関する実態調査
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本 昌子・富山 丈路・須藤 史晴・小林 宏明・酒井 奈緒美
2. 発表標題 発達障害を伴う吃音の指導・支援(3) クラタリング(早口言語症)への取り組み
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川合紀宗・鈴木伶奈
2. 発表標題 吃音のある中高生が学級担任に求める合理的配慮
3. 学会等名 第43回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川合紀宗・矢野真依子・小田桃子
2. 発表標題 吃音者のハーディネスとレジリエンス コミュニケーション態度との関連から
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第5回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小田桃子・川合紀宗
2. 発表標題 語頭音節の種類により発話容易性や音読潜時が異なるか 吃音者と非吃音者の比較
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第5回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小宮歩・宮本昌子
2. 発表標題 吃音のある児童の自尊感情に関わる因子の探索
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本昌子・小林宏明・中村勝則・酒井奈緒美
2. 発表標題 発達障害を伴う吃音の指導・支援（2）予後を見据えた支援の在り方
3. 学会等名 日本特殊教育学会学第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Factors that affect self-esteem of school-age children who stutter
3. 学会等名 The 11th Oxford Dysfluency Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kawai Norimune, Kobayashi Hiroaki, Hara Yuki, and Miyamoto Shoko
2. 発表標題 Types of Reasonable Accommodations Classroom Teachers to Provide for Middle-High School Students Who Stutter
3. 学会等名 The 2017 ASHA Convention (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 仲野里香・原由紀
2. 発表標題 幼児吃音への指導アプローチ 遊びながらすらすらに～教材選びのコツ～
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第5回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林宏明
2. 発表標題 「アンケート」を活用した吃音のある児童への教育実践（2）ICFに基づいたアセスメントプログラムを用いて
3. 学会等名 第55回日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 小林宏明	4. 発行年 2019年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 イラストでわかる子どもの吃音サポートガイド	

1. 著者名 E・チャールズ・ヒーリー、川合紀宗	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学苑社	5. 総ページ数 152
3. 書名 CALMS：吃音のある学齢期の子どものための評価尺度	

1. 著者名 イヴォンヌ・ヴァンザーレン・イザベラ・K・レイチェル (共著)・森 浩一・宮本 昌子 (監訳)・小林 宏明・原 由紀・川合紀宗他 (分担訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学苑社	5. 総ページ数 224
3. 書名 クラタリング 早口言語症 特徴・診断・治療の最新知見	

1. 著者名 宮本 昌子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ジアース教育新社	5. 総ページ数 252
3. 書名 合理的配慮ハンドブック～障害のある学生を支援する教職員のために～	

1. 著者名 太田 信夫・柿澤 敏文・宮本昌子他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 障害者心理学	

1. 著者名 柘植 雅義・宮本昌子他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 220
3. 書名 特別支援教育の到達点と可能性	

1. 著者名 吉田武男・小林秀之・米田宏樹・安藤隆男・宮本昌子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 特別支援教育：共生社会の実現に向けて	

1. 著者名 日本小児耳鼻咽喉科学会・飯野ゆき子・原由紀他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金原出版	5. 総ページ数 516
3. 書名 小児耳鼻咽喉科 第2版	

1. 著者名 深浦順一・内山千鶴子・原由紀他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 199
3. 書名 言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編	

1. 著者名 大森孝一・永井知代子・深浦順一・渡邊修・原由紀他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 456
3. 書名 言語聴覚士テキスト第3版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原 由紀 (HARA YUKI) (50276185)	北里大学・医療衛生学部・准教授 (32607)	
研究分担者	小林 宏明 (KOBAYASHI HIROAKI) (50334024)	金沢大学・学校教育系・教授 (13301)	
研究分担者	酒井 奈緒美 (SAKAI NAOMI) (60415362)	国立障害者リハビリテーションセンター(研究所)・研究所 感覚機能系障害研究部・研究室長 (82404)	
研究分担者	宮本 昌子 (MIYAMOTO SHOKO) (70412327)	筑波大学・人間系・教授 (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The Inaugural Joint World Congress of the International Cluttering Association, International Fluency Association and International Stuttering Association	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	The George Washington University	Wayne State University	The University of South Florida	
米国	Southern Illinois University	La Salle University	Michigan State University	
インドネシア共和国	Indonesia University of Education			